

夢は海外の被災地支援に関わること

復興

ひと模様

午前6時、宮古市赤前の民家に、包丁の音が響く。辺りは津波で家々が流され、あかりも少ない。包丁を握るのは、県立宮古商業高校3年の山根りんさん(18)。タマネギをスライスし、ソーセージと炒め、ケチャップであえる。湯気が立つご飯をおむすびに。それを手際よく父親の孝之さん(45)と自分の弁当箱に詰めていく。

震災前は台所に立つことはなかった。「でも自分でやんなきゃなくなっちゃったから」。母親のゆかりさん(当時42)はもういない。

2011年3月11日、フットボール部の練習で高校のグラウンドにいた。揺れのと、ゆかりさんが車で迎えにきた。「お父さん、おなかせせてるかも」。2人は、コンビニエンス

「自分らしく」こそ親孝行



早朝、弁当をつくる山根りんさん＝宮古市、葛谷晋吾撮影

「ちゃった。ごめん。ごめん」。必死で伝えた。孝之さんは「いいがらいいがら。お前がいはそれでいいよ。それでいい」。

2カ月後に高校の授業が再開したが、割り切れない話になる。ゆかりさんのことを、聞かれるのも話すのも嫌だった。あのとき、学校にとどまればよかった。コンビニに寄らなければよかった。そう考えずにはいられなかったから。

りんさんを変えたのは、県外の女性から一昨年10月に届いた手紙だった。「1人じゃないよ。あなたは立派だけど、気丈にふるまわなくていいんだよ」

いつも人に見られている気がした。「がんばれ」という言葉を聞きたくなかった。それが「見知らぬ人からの言葉で、すごく気が楽になった」。

昨年9月、担任の教師がチラシを持って来た。若者の留学支援など、教育面で被災地を支援する「ピョンドトゥモロー」(一般財団

法人教育支援グローバル基金主催)のチラシだった。そこにあった「東北未来リーダーズサミット」に参加し、被災地の高校生、NGO(非政府組織)の職員らと意見交換した。「自分の経験を、日本の未来や海外の被災地で役立てることが出来るかもしれない」。

そう考えるようになった。いま、NGOの職員として海外の被災地での支援に関わりたいという夢を持つ。今春、宮古を離れ、埼玉の大学へ進学する。

孝之さんが寂しくならないうようにと、盛岡のペットショップで購入した生後6カ月のシバインを飼い始めた。冬休みに入り、ゆかりさんが残した化粧品や洋服の整理も少しずつ始めた。「宮古に残ることも考えただけど、母がなくなったことを言い訳にはしたくない。自分らしく生きることが、親孝行と思ってます」

小学校のとき、父と母が教えてくれた。「りんの名前にはね、凛と生きる人になつてほしいって願いが、込められているんだよ」

(国吉美香)